

「生命の海科学館」の活動を通じた社会連携活動の在り方の開発研究Ⅰ

— 特に、発信型科学館改革構想の策定について

○ 川上 昭吾, 山中 敦子, 浅井 猛

KAWAKAMI Shogo, YAMANAKA Atsuko, ASAI Takeshi

生命 (いのち) の海科学館 (蒲郡市立)

【キーワード】 科学館, 生命の海科学館, 学校と科学館の連携, 科学館の利用

1 目的

科学館と学校との連携について, 筆者らのこれまでの研究で, 連携を進めるに当たって科学館側と学校側の双方に克服しなければならない課題があることを明らかにしてきた(文献欄参照)。

この度川上と山中は同じ「生命の海科学館」(注: 生命は「いのち」と読む)に勤めることとなり, そこに浅井も加わって科学館と社会との連携を進めることになった。そこで, 科学館と特に学校との連携のあり方について, 改革の経緯と結果, 及び生起する問題点等を報告して行くことにする。

2 科学館廃止を含む検討内容

蒲郡市は「生命の海科学館」の今後について, 廃止も含め検討してきた。

- ・ 2007 年 12 月「生命の海科学館見直し検討委員会準備会」が設立。報告書提出(2008,2)
- ・ 2008 年 5 月「生命の海科学館見直し検討委員会」設立。存廃を検討し, 「存続するが大きな改革が必要」と結論(2008,12)。
- ・ 2009 年 6 月「生命の海科学館実施計画策定委員会」が設立, 学校や社会との連携を強化することを核とした改革構想(2009,12)。

3 改革の具体化

2010 年 4 月に川上が館長(非常勤)に就任した。

学芸員(専任)は2009年10月から山中が就任, インタープリター浅井(非常勤)は2010年4月市内の退職教員が5年間の期限で就任した。

さらに, 事務の支援体制を強化する予定である。

人的な体制は万全でないが, 現状ではベストであると考えている。特に, インタープリターを設け, 退職した教員を充てたことにより, 学校との連携は強固になりつつある。

4 まとめ

当館の改革は緒に就いたばかりである。

学校と連携する場合, 科学館側はどのようにすべきか把握しているつもりである。それを行政に理解してもらい, 改革を進め, 連携がどのように具体化するかを今後逐一報告し, 科学館と学校の連携のあり方を提案していきたい。

参考文献

- 寺田安孝・永田祥子・川上昭吾: 博物館と学校との連携による学習プログラムの開発, 愛知教育大学教育実践総合センター紀要, 8, 45-49, 2005.
- 永田祥子・川上昭吾: イギリスにおける博物館やフィールドセンターの学校向けサービスと学校がそれを利用している実態, 理科教育学研究, 47(1), 45-58, 2006.
- 山中敦子・川上昭吾: 学校-科学館連携におけるミュージアム・リテラシー向上の試み, 愛知教育大学教育実践総合センター紀要, 11, 61~66, 2008.
- 寺田安孝・山中敦子・川上昭吾: 科学に関心を持つ市民を育成するための博学連携プログラムの実践, 愛知教育大学教育実践総合センター紀要, 11, 55~60, 2008.
- 寺田安彦・川上昭吾: 高校生のための博物館学習プログラムの実践, 愛知教育大学教育実践総合センター紀要, 13, 51-58, 2010.
- 生命の海科学館見直し検討委員会準備会報告書
<http://www.city.gamagori.aichi.jp/kentoinakai/kagakukan/jumbikaihokoku.pdf>, 2008,2.
- 生命の海科学館見直し検討委員会報告書
<http://www.city.gamagori.aichi.jp/kentoinakai/kagakukan/kentoinakaihokoku.pdf>, 2008,12.
- 生命の海科学館実施計画策定委員会報告書
<http://www.city.gamagori.aichi.jp/kentoinakai/kagakukan/jisshikeikaku.hokoku.pdf>, 2009,12.

謝辞

本研究は科学研究費基盤研究(A)2024006801(代表者:野上智行)の助成を受けて行った。